

東京バッハ合唱団 月報

〔第550号〕 2008年4月

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 Tel : 03-3290-5731 Fax : 03-3290-5732
E-mail : bachchortokyo@aol.com http : //www2.tky3web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.550

April 2008

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

大村先生ご夫妻の喜寿と還暦のお祝いの会

菅間 五郎

喜寿の喜という字を草書体であらわすと七が3つ重なるところから、喜の字の祝いといって先人たちが祝賀の宴を張るようになったようですが、いつ頃からのことが寡聞にして知りません。洋の東西を問わず七の数は幸運の象徴とは知っていましたが、英語の辞書を念のため引いてみましたら、驚いたことにまさしく「幸運の象徴」と書いてありました。一方還暦は十干十二支が1回りするということで人生の節目の年であり、これまた大変お目出度いこととし、お祝い事となりました。

前置きが長くなりましたが、このたびお二人のお祝いに参席させていただきましたので、この紙上を借りまして当日の様子を報告し、参加できなかった皆様方と共にふたたび喜びを分かちあいたいと思います。箱根から目白の教会へ直行した月曜の練習のときに、康さん(A)からすでに一部報告がされていますが、3月9日と10日の2日間、合唱団として非のうちどころのないお祝いができ、ご夫妻にもご満足いただけたものと思います。

初日、新宿から高速バスが箱根に近づくと眼前に雲一点のない真白な富士山の勇姿がせまり、全員が大喜びの声を上げました。「菅間さん写真は？」という声が聞こえましたが、翌日いくらでもいい景色のところがあろうと思いい、バスの窓ガラスが汚れているので、富士山の写真は明日にしましようと言ったのが大間違いで、翌日は雨と霧のため結局のところ富士山の写真は1枚も撮れず仕舞いになり残念なことになりました。

今回の旅に、私はツアーに参加するような気分で何もお手伝いできませんでしたが、話を伺いますと、大村先生の女学校(現・都立富士高校)時代のご友人であり、合唱団の後援会の一員である中澤富士子様のご手配によって全てが成り立っていたことを知り、たいへん有り難く思いました。2日目の目白での練習の開始時間から逆算して、日程を立てて頂いたそうです。有難うございました。参加できなかった皆様には申し訳ありませんが、素晴らしい温泉宿で山海の珍味を鱈腹味わいました。箱根山中には美術館がたくさんありますが、ガラスの森美術館、ポーラ美術館、成川美術館をあますところなく見物し、霧の中のロープウェーに揺られて大涌谷にも行き、1個食べると7年長生きするという温泉卵も食べ、芦ノ湖の海賊船にも乗ってきました。この間中、平田さん(A)の働きは獅子奮迅のようでした。お疲れ様でした。なお、加藤さん(B)と三上さん(A)は2日目の旅程には参加

されませんでした。三上さんが目白の練習にお顔を出されたのには驚きました。敬意を表します。

お祝いの宴(初日の晩)は、余人に代えがたい名司会者の加藤さんによって取りしきられ、突然のことながらこの私に乾杯の音頭をとれとの下命があり、古希の歳ではありますが、合唱団員としては青二才であり、若干役不足ではありましたが、下記しますようなご夫妻のために用意しました短歌を披露しながら、お祝いのため精一杯の声を上げさせてもらいました。

参加者総勢13人でありましたので、奇しくもユダを交えた「最後の晩餐」となったと皆ではしゃぎましたが、少人数でありましたため、全員からの祝辞、賛辞をご夫妻に伝えることができました。後援会名簿の筆頭にあります青木道彦様、中澤様と同じく先生の女学校時代のご友人の猪狩恭子様、元団員(現後援会員)の藤田正記さんからの暖かいお言葉は先生ご夫妻の心に響くものがあったと思います。なかんずく参加者最長老の戸川さん(B)より、祝賀の宴にふさわしくご夫妻のために謡曲「高砂」が披露され、会は盛り上がりました。

最後に先生から、我々合唱団一同からのお祝いの贈り物に対しお礼の言葉を頂戴しました。お祝いは品物でなく現金となりましたが、これも合唱団のためというお言葉は私の胸に刺さりました。わたしの短歌4首を添えて報告を終わりますが、先生から内祝いにと頂戴しましたご労作の『私の萬葉百選』に対する御礼をあらためて申し添えます。ありがとうございました。

老いてなお意気軒昂の人ここにあり

合唱団の母なる強し

生涯に悔いぞなからん命賭し

バッハの宇宙に浸りてあれば

命賭しバッハの思い繋ぐんと

一筋の道歩む君かな

還暦の夫が支える喜寿の妻

類稀なる今日の祝いぞ

(団員：バス)

カンタータ第 182 番《あまつ君を 喜び迎えん》
»Himmelskönig, sei willkommen« BWV182

1. ソナータ

2. 合唱

天(あま)つ 君を よろこび 迎えん
われらを なが シオンと なさしめたまえ
来ませ
われらが 心は 主の 家と なりぬ

3. レチタティーヴォ(バス)

見よ われ 来たる, 記(しる)されたる ごと;
なが み心を, わが 神, われ よろこび 行わんと
(詩編 40:8, 9)

4. アリア(バス)

強き 愛もて
とうとき 神の子
み座(ざ)を
離れたまいぬ
その身を この世に
ささげたまいぬ
血を 流したまいぬ

5. アリア(アルト)

集え 主の もとに
まこと もて 従いゆく もの
まとえ なが 穢れなき 衣(ころも)
まとえ 信仰の 衣
身も 霊(たま)も 財(たから)も
主に ささげよ

6. アリア(テノール)

イエス, よき日も 悪しき日も
なれと ともに 歩ましめたまえ
「十字架」を 迫らるる ときも
逃れず 耐えしのばしめよ
主, なが 十字架の もとに
われ 勝利を 見出さん

7. コラール

主の 十字架こそ
深き 喜び
み傷 いばらは
わが 心の 慰め
この み恵に
わが 霊(たま) 燃ゆ
天の み国にて
受け入れたまえ

(Paul Stockmann „Jesu Leiden, Pein und Tod“1633 第 33 節)

8. 合唱

いざ ゆかん 喜びの国 サレムに われら
従わん 主に 愛にも 悩みにも いかなる 時にも
主は 先立ち
道を ひらきたまわん

解説

初演: 1714 年 3 月 25 日(棕櫚の日曜日), ヴァイマル(宮廷楽師長就任第 1 作). 再演: 1724 年 3 月 25 日(受胎告知の祝日), 1728 年頃, ライプツィヒ .

福音書章句

- (1) 棕櫚の日曜日 (ヴァイマル初演)
= マタイ 21 : 1-9 (イエスのエルサレム入城)
(2) 受胎告知の祝日 (ライプツィヒ再演)
= ルカ 1 : 26-38 (イエスの誕生が予告される)

< イエスのエルサレム入城 > (マタイ 21 : 1-9)

さて, 彼らがエルサレムに近づき, オリブ山沿いのベテパゲに着いたとき, イエスはふたりの弟子をつかわして言われた, 「向こうの村へ行きなさい. するとすぐ, ろばがつながれていて, 子ろばがそばにいるのを見るであろう. それを解いてわたしのところに引いてきなさい. もしだれかが, あなたがたに何か言ったなら, 主がお入り用なのです, と言いなさい. そう言えば, すぐ渡してくれるであろう. こうしたのは, 預言者によって言われたことが, 成就するためである. すなわち,

「シオンの娘に告げよ,
見よ, あなたの王がおいでになる,
柔和なおかたで, ろばに乗って,
くびきを負うろばの子に乗って」.

弟子たちは出て行って, イエスがお命じになったとおりにし, ろばと子ろばとを引いてきた. そしてその上に自分たちの上着をかけると, イエスはそれにお乗りになった. 群衆のうち多くの者は自分たちの上着を道に敷き, また, ほかの者たちは木の枝を切ってきて道に敷いた. そして群衆は, 前に行く者も, あとに従う者も, 共に叫びつづけた,

「ダビデの子に, ホサナ.
主の御名によってきたる者に, 祝福あれ.
いと高き所に, ホサナ」.

ここの光景から, 当カンタータがつくられているのだが, イエスをこのように期待をもって迎え入れた群衆は, 数日後にイエスを「十字架にかけよ」と罵ったひとびとと, ちがったグループだったのだろうか, それとも同一の人たちが, 期待を裏切られてよけいに激したのだろうか. ろばに乗った柔和ないでたちのイエスは, 城内に入

るや、たちまち攻撃的に、宮潔めにとりかかり、病人をいやし、悔い改めを説いて、聖職者たちを挑発した。こうして、十字架への道がひらかれたのだった。

弟子たちをはじめ、まわりの群衆の混乱につつまれた一週間だが、バッハは、ドラマティックにたたみ込むよりも、むしろその奥で静かに進行する成り行きに照準を合わせて、神々しくも清らかな音楽をつくりあげたのである。

編成：独唱A・T・B，4声部合唱．リコーダー，オーボエ，弦合奏，通奏低音．

レチタティーヴォは、2)の、バスによる詩編朗読のみ．独唱は、B・A・Tの順にダカーポ・アリアをかさね、終わりに2曲の合唱曲で、イエスの十字架による、われわれの心の中へと向かった主の凱旋を歌う．バッハの活動初期の、飾らぬ作風がかえって内容の深さを浮き立たせる．

1) ソナータ

バッハはこのカンタータに演奏ごとに手をくわえて、4種類の稿を残しているが、今回は1997年刊の新バッハ全集版に準じて、ライプツィヒ第2稿を用いた．グラヴェ・アダージョのこのソナータ（器楽曲）では、リコーダーと第1ヴァイオリン（前半はリコーダーのみ）、オーボエと第2ヴァイオリンとが、それぞれ重奏する2声部のかけ合いで、フランス風序曲の荘重さと王の入场（＝城）を表わしている．（因みに、東京バッハ合唱団2007年刊のブライトコプフ版はライプツィヒ第1稿に拠っている．リコーダー1本と独奏ヴァイオリンとが、それぞれ単体で声部を担当．初期バッハの素朴さという点では捨てがたい）

2) 合唱

群衆のイエス歓迎の行進を、静かなフーガで追う．あまつ君 来ませ と、段落ごとに一斉に呼びかける．ダカーポ形式．

3) バス・レチタティーヴォ

詩編 40:7,8「見よ、わたしは参ります．書の巻に、わたしのために記されています．わが神よ、わたしはみこころを行うことを喜びます．」通奏低音のみで、淡々と告げ知らされる．

4) バス・アリア

わが身をささげた主イエスの強い愛を、バスと弦合奏とでしっかりと歌う．

5) アルト・アリア

リコーダーとアルトのダカーポ・アリア，ラールゴ．つどえ 主のもとには、直訳では「救い主のもとになれらひれ伏せ」で、下向動機の主題がその様子を描写する．

6) テノール・アリア

16分音符のはげしい通奏低音にみちびかれて、十字架

のイエスに、決然とつき従う弟子の歌．

7) コラール

アリアが3曲つづいたあと、内省的なコラール合唱が、対位的に整然と、深々と奏される．リコーダー，オーボエ他フルオーケストラで、ひきつづき8)に繋がる．

8) 合唱

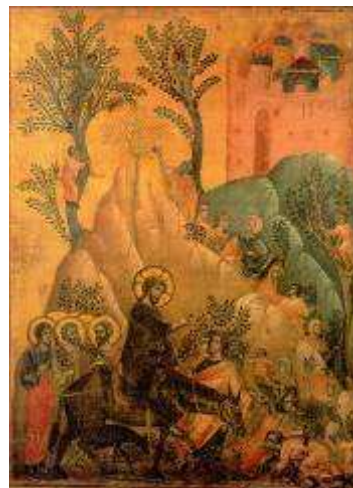
復活した勝利の主イエスが、われわれの心のなかに凱旋する．われわれは導きにしたがって、喜びの国 サレム（＝エルサレム，天国・神の国）へと上ってゆく．舞曲風の8分の3拍子だが、室内乐的に落ち着いたフィナーレとなって、わたしたちの心を満たしてくれる．

< キリストのエルサレム入城 > 図

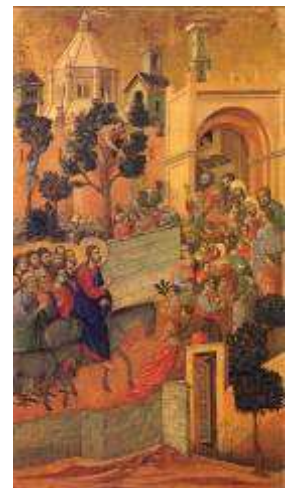
今回のチラシを見て、挿図に見覚えがあるとお思いになられた方もいらっしゃるでしょう。

グイード・ダ・シエナ（図左）は、シエナ派の祖とされる13世紀の画家で、われわれが去年3月の《マタイ受難曲》公演に際し、チラシやプログラムの挿図として用いたドゥッチオ（図右）の先輩格にあたります。この< キリストのエルサレム入城 >でも、描画技法にとどまらず構図やアイデア上の影響もきわめて濃厚です。

カンタータ第182番は、キリスト受難の物語りのまさに序曲として、味わわれるべき作品です。



図左：第102回定期演奏会チラシの絵．
Guido da Siena (13c, Siena Pinacoteca Nazionale)



図右：第100回定期演奏会《マタイ受難曲》プログラム挿図．
Duccio di Buoninsegna (1255/60 - 1315/18, Siena, Museo dell'Opera del Duomo)

東京バッハ合唱団創立45周年記念公演・第100回定期
[CD]《マタイ受難曲》追加発行!!

上記の記念公演会場録音CDは、長らく品切れでご迷惑をおかけしておりましたが、このたび追加発行いたしました。事務局までお申し込みください。

3500円(送料込み) / CD3枚組 / 当日プログラム付き

柳元 宏史

連載：全部おすすめ 50 曲選!! <その 13>

カンタータ第 6 番《とどまれ我らと 夕闇せまり》

今年のイースター（復活祭）は 3 月 23 日であった。春分の日の直後の満月に左右されるイースターで、最も早いイースターである。イエスの復活は、死の暗闇では終わらない希望の光をしめすキリスト教信仰の根幹といっている。

カンタータ第 6 番は、1725 年 4 月 2 日の復活節第 2 日にライプツィヒで初演された。冒頭の合唱から、なんと情感豊かな曲だろう、と思わずため息をついた。ここであつかう聖書の物語を、あたかも眼前で上演しているかのように、音楽によって見事に描きあげているバッハの手法は圧巻だ。

イエスが復活したその日、うわさを聞いた二人の弟子が不安げに一連の出来事を語り合いながらエマオへ向う。その途上イエスが合流する。二人はその人がイエスであるとはにわかには分からず、彼にその日に起きたことを伝え、イエスはその出来事が聖書の言葉の実現なのだということを二人に教えながら歩いていく。二人はまだイエスとは分からない。そうこうするうち、夜のとばりが降りはじめ、なおも先に行こうとするイエスを二人は引きとめ、いっしょに泊まってくれるよう懇願する。そして夕食の食卓で二人は、彼からパンを裂き与えられたときに、ようやくこの人こそがイエスであったと目が開かれるが、その途端イエスは見えなくなってしまう、というドラマティックな物語なのである。

曲は、イエスにいっしょに留まるように懇願するところから始まる。しかしこの とどまれ という歌詞は、別の意味に転じてこの曲のテーマとなっている。はじめの合唱（第 1 曲）では、文字どおりイエスにとどましてほしい、と訴えるのだが、2 曲目のアルト・アリアでは み光よ とどまれ となり、5 曲目のテノール・アリアでは み言葉の光よ 明るく輝け と、み言葉 がここに留まって、行く先を明るく照らしてほしい、という信仰者の切なる願いへと転じていく。

曲の楽しみとしては、3 曲目のコラールである。チェロに導かれ、ソプラノ斉唱が美しいコラールを歌う。その内容は、み言葉の光がわれらを離れず、暗い現実を照らし、安らぎを与えてほしいという、このカンタータの中心的な祈りである。主イエスの道にいざなわれるような印象深いメロディーを歌う、先のテノール・アリア（第 5 曲）も必聴である。

（やなぎもと・ひろし、団員：バス）

CD バッハ・カンタータ 50 曲選 [第 1 巻] に収録。A 佐々木まり子, T 佐々木正利, B 渡辺 明, 大村恵美子指揮・東京バッハ合唱団, 東京カンタータ室内管弦楽団。1987 年録音（第 62 回定期演奏会・石橋メモリアルホール）。
楽譜：東京バッハ合唱団/ブライトコプフ「50 曲選」No.3